

# 昭和28年日本海漁況の経過

(1953年1月～12月)

下村敏正

A General Review of the Japan Sea's Fishing Conditions in the Year 1953

by

Toshimasa SHIMOMRUA

## I はしがき

この報告は、昭和26年以来第1図様式により、下記各地（第2図）から受けている、旬毎の漁況報告の内、水産庁駐在員：

山形県豊浦・新潟県直江津・能生・富山県魚津・鳥取県境

漁業協同組合：

秋田県八森・新潟県両津・石川県西海・金石・橋立・福井県漁連敦賀支所・同小浜支所・京都府下宇川・鳥取県田後

その他：

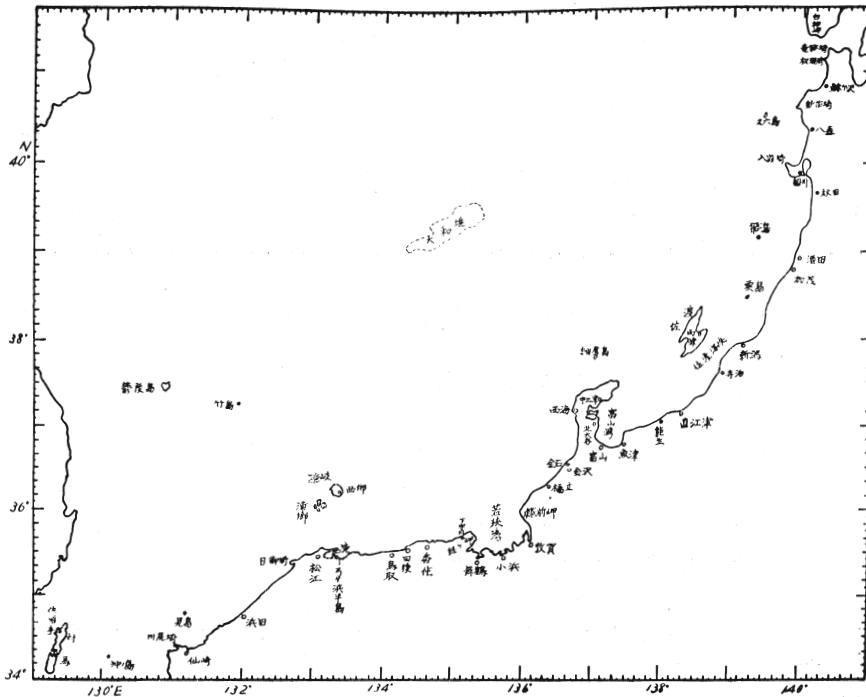
大洋漁業株式会社現場（対馬佐須奈・福井県小浜・石川県北大呑・富山県四方・新潟県佐渡ヶ島・北海道石狩湾）、日水研香住支所（兵庫）、同隠岐島支所

昭和28年1月～12月の分をとりまとめたものである。これら各地からの報告は、26年3月以来逐次整理して、日水研開発部から「日本海漁況概報」（旬報）として、各府県水産試験場、その他水産研究機関、当業者に対し、

調査地	漁況	旬報	報告者	月	旬	其の他
魚種別						
項目						
漁具及漁獲量						
漁場						
漁獲の前年比						
平均体長 及び体重						
漁期の遅速						
海洋気象状況 及出漁日数						
例年に比し 変つて居る事						
漁況の見通し						
延出漁船数						
参考事項						
其の他						総漁獲高

第1図 漁況報告様式

日本海区水産研究所



第2図 日本海主要地名

旬300部を発行して来た。この旬報の目的は、戦後以来無線による速報が不可能であつたため、日本海全体にわたる旬間漁況の速報及び漁況の概要を把握することにあつた。

なお、この報文のとりまとめにあつては、各府県水産試験場の各種報告、農林省統計調査部発行の「農林省統計表」、「農林水産統計月報」その他を参照した。前記各地の報告担当者各位及び各府県水産試験場の各位に対し、深甚の謝意を表します。また図版の消書については、日水研開発部町中茂技官の手を煩わしたことをここに記し、以て謝意にかえます。

最後に、漁況は漁獲対象により、地方により、状況を異にすることが非常に大きく、それらを日本海全体にわたって、統一的に記載することは不可能に近いので、この報文では概観的に取扱うこととした。データの関係上、記述に精粗の点のあることは止むを得なかつた。一方つとめて、誤なからんことを期したが、御批判を得れば幸いです。

### Ⅰ 漁況の概要

昭和27年に引続き、日本海は高温に経過し、多くの重要魚種について、始漁期が数日以上もおくれたり、或は地域的に極端な不漁に見舞れたりした。これが飛躍して、ソ連による間宮海峡の埋立説が流布され、埋立が原因で北方からの寒冷水がせき止められたためであろうとの噂が広まつたりした。もち論埋立が実施されたとしても、対馬暖流の海況には、全く影響はないのであるが、とにかく、昭和28年の夏は梅雨期に豪雨があり、大洪水が各地に発生した。秋には又台風が襲われるなどの異常気象が見られ、農作物の被害も甚大で、米の生産高は27年比1,200万石の減収(5,500万石)となつた。このため各地に餌を求める熊が山を降りて町に出没し、富山市内にさえ出没して人畜に被害を与えた。

一方海では、春期京都府・兵庫県方面にクラゲの大繁殖があつて、網目が詰るなど、漁業操業上多大の障害

をもたらした。日本海全体にわたって、かかる現象があつたのかも知れないが、もしそうだとすれば、大早魃に襲われた昭和25年と軌を一にすることとなる。又隠岐島・能登半島と並んで、日本海におけるサバ巾着網漁業の3大中心地たる、若狭湾方面のサバの著しい不漁、代つて富山湾以西の日本海における中、小アジの大豊漁（例えば島根県は413万メで、27年の3倍）、兵庫県及び石川県以北におけるハタハタの近年にない豊漁（例えば秋田県は67万メで27年の3倍、10年ぶりの大漁）、隠岐島方面における秋イカとブリの大不漁、春期同方面のサバ巾着網の大豊漁のため、鳥取県始まつて以来の最高漁獲高（1,841万メ）をあげた。同県戦前の年間漁獲高は300万メ足らずであつた。

このように、色々興味ある漁況であつたが、28年における日本海総漁獲高は13,595万メ（魚介草類などを含む）で、27年より約600万メの減少であるが、魚類だけについてみると、約300万メの増加であり、全国総漁獲高113,686万メの12%に当る。日本海総漁獲高13,595万メの25.6%（3,481万メ）は、青森県（権現崎以西）～石川県の日本海北区の漁獲高である。すなわち福井県～山口県の日本海西区の漁獲高は、北区の3倍である。かかる大差の生ずる主因は、山口県日本海側の4,009万メという、北区の総漁獲高を上回る、ぼう大な漁獲高のためである。しかし山口県の4,009万メの内の80%は、大企業による下関漁港への水揚げであり、山口県漁業に占める下関漁港の重要性、及び沿岸漁業との余りにも大きな差が目立つ。

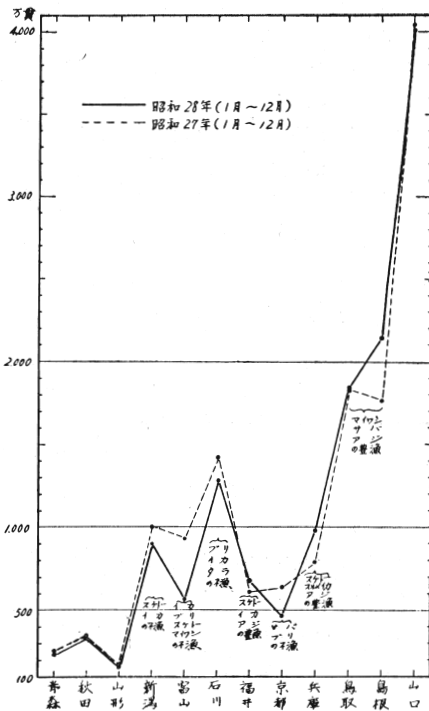
今各府県別に漁獲高を示すと、第3図となるが、階層別にすれば次のように、一般的にいつて、南方程漁獲高が大である。

- 500万メ以下：青森・秋田・山形・京都
- 1,000万メ以下：新潟・富山・福井
- 2,000万メ以下：石川・兵庫・鳥取
- 2,000万メ以上：島根・山口

る。これは、漁獲対象物の種類の多いことに比例するが、アジ類・イワシ類・サバ類・底曳網漁獲物の大量なことが原因をなす。

日本海全体を通じてみた場合、総漁獲高13,595万メの内、500万メ以上の主要漁獲物は、次の7種であり、これだけで日本海総数の60%、7,677万メを占める。この内、キグチは山

魚種	日本海総数	日本海総漁獲高に対する比	昭和27年比
マイワシ	2,385 万貫	17.5 %	+ 176 万貫
サバ	1,495 "	11.0 "	0 "
アジ	1,019 "	7.5 "	+ 360 "
カレイ類	870 "	6.4 "	- 384 "
スルメイカ	784 "	5.8 "	+ 164 "
ウルメイワシ	596 "	4.4 "	0 "
スケトウダラ	565 "	4.2 "	0 "
キグチ	529 "	3.4 "	
計	7,677 "	60.0 "	



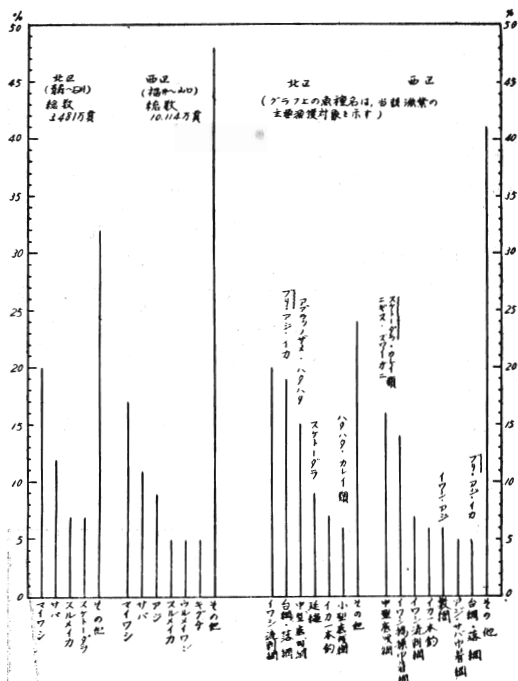
第3図 昭和28年府県別年間総漁獲高

口県のみ水揚げされる、日本海としては特殊の魚種である。

日本海北区、同西区の主要魚種及び主要漁業は、第4図のとおりである。

27年に比し、漁獲の増加した主なものは、マイワシ・アジ・カレイ類・ズワイガニであり、反対に目立って減少したのは、スルメイカ・ブリ・スケトウダラ・タラなどである。

日本海全体の漁獲高の月別推移は、全国総数が4月（14,451万貫）と10月（12,516万貫）に山を持つのと、同じ傾向を持つ。今日本海を北区（青森県～石川県）・西区（福井県～山口県）に分けて、それぞれの山・谷をみると次のようになる（第5図）。



第4図 昭和28年日本海海区别の主要魚種及び主要漁業

1) 西区の月間漁獲高は常に600万貫以上であるが、北区では3~5月の300万貫以上を除き、多くは200万貫以下である。

2) 両区共、8月及び1~2月を年間最低期とするが、最盛期は北区5月、西区4月である。8月は、いわゆる夏枯期で、魚群の洄游なきこと、1~2月は北西風の卓越期で、月間出漁日数が3~4日、多くても1週間という荒天のために、最低期となる。

北区最盛期の5月は、次のような魚種の盛期が原因で、5月総数772万貫の60%をしめる。

- マイワシ 372万貫 (内、新潟県100万貫)
- サバ 92万貫 (内、石川県 80万貫)

西区最盛期の4月は、4月総数1,205万貫の57%をしめる。これは次の魚種の多獲に因る。

- マイワシ 187万貫 { 内、福井県45万貫  
鳥取県76万貫  
山口県48万貫
- サバ 146万貫 (内、鳥取県99万貫)
- ウルメイワシ 133万貫 (内、鳥取県99万貫)
- スケトウダラ 115万貫 (内、兵庫県80万貫)
- カレイ類 105万貫 (主に兵庫県・山口県)

3) 他に北区では12月、西区では10月に、山を作るが、

北区の12月は、12月の総数 304 万貫の67%をしめる、次の多獲魚種に基く。

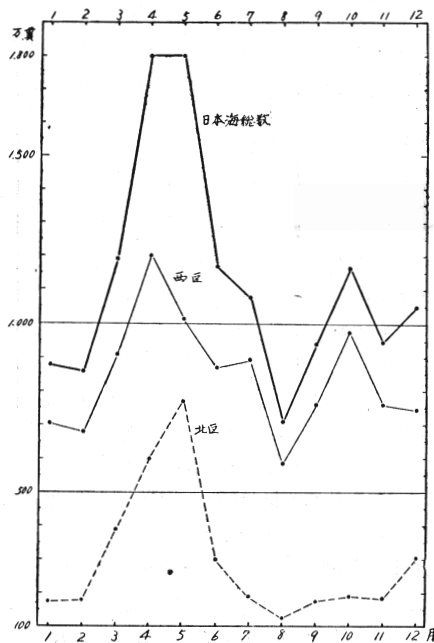
- サバ 72万貫 (内、新潟県65万貫)
- ハダハタ 62万貫 (内、秋田県51万貫)
- ブリ 28万貫 (内、富山県16万貫)
- アブラツノザメ 26万貫 (内、青森県25万貫)

西区の10月の山は、次の魚種による。

- アジ類 182万貫 (内鳥根県117万貫)
- マイワシ 131万貫 { 内、鳥取県22万貫  
鳥根県83万貫  
山口県19万貫
- スルメイカ 86万貫 (若狭湾以西)
- サバ 62万貫 (内、鳥取県46万貫)
- ウルメイワシ 39万貫 (主に鳥取県・鳥根県)

その他、兵庫県以西の底曳網による、

- キグチ 76万貫
- カレイ類 60万貫
- ニギス 45万貫
- ハモ 23万貫 など。

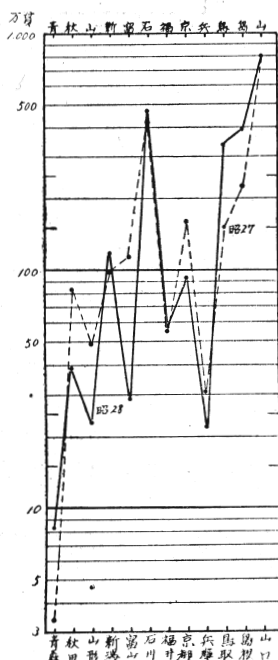


第5図 日本海総漁獲高の月別推移

## Ⅲ 主要魚種の漁況

マイワシ *Sardinia melanosticta*

28年の日本海総漁獲高は2,385万貫（全国9,163万貫の26%）で、27年比176万貫の増であるが、これは兵庫県以北の減産にもかかわらず、鳥取県・島根県の豊漁（27年の2~1.5倍）に原因する。全体として、北区29%、西区71%の漁獲であつた（第6図参照）。



第6図 日本海マイワシの府県別・年別の年間漁獲高

日本海の大羽イワシ春漁は、5月下旬ないし6月に、ウルメイワシがとれ出すと終漁となるが、28年の大羽イワシ漁は、昭和27年12月13日を始漁とする山口県の刺網漁業から始まった。日本海の大羽イワシは、大部分が流刺網でとられるが、山口県の始漁日は、27年比1週間の遅れである。28年の大羽イワシ漁は、鳥取県・能登西岸・秋田県を除いて、一般的に始漁日が27年より遅かつた。これは一つの特徴である。

これら始漁日の早かつた地方についてみると、鳥取県～能登西岸では27年より1旬早く、鳥取県3月19日・石川県3月19日、秋田県八森方面は4日早く5月19日が始漁となつた。しかも豊漁であつたため、鳥取県は例年5月が年間最高漁獲月であるにもかかわらず、28年は4月が最高漁獲月（総数327万貫）となつた。福井県も同じく4月が最高月となつた。

さて全般的に始漁の遅れたことであるが、長崎県平戸島・二神島方面の始漁は1月18日で、例年より1旬遅く、天草方面ではまだ漁が始まつておらず、隠岐島方面は27年より1週間遅く、富山湾・新潟県沿岸も遅かつた。山形県は1旬遅れて、5月中旬に漁期に入つた。特に著しいのは、兵庫県方面であり、香住では、4月上旬隠岐島方面で連日、夜焚巾着網による、大羽、中羽イワシの大豊漁（春イワシ283貫メ、27年の3倍以上）が続いていたにもかかわらず、5月になつても来遊なく、7月に入つて漸やく漁らしいものがあつた程度（7月中旬60,000貫、大羽・中羽・小羽の混獲）で、もち論大不漁であつた。

その他の特徴をも列記すれば、

- 1) 全般的に始漁日が1週間以上遅れた。
- 2) 長崎県平戸島・二神島のような南方から、日本海の北部まで、全般的に、
  - i) ムラ掛りが甚しかつた。すなわち、群は薄くて、漁場範囲が広がつた。
  - ii) 游泳層が深かつた。例えば、山口県川尻・見島方面の3月上旬～中旬の樽網の長さは、30尋以上が好漁であり、能登西岸方面における初漁期4月上旬～中旬のそれは、27年15尋、28年20尋以上であつた。
  - iii) 小形魚が多かつた。例えば能登西岸では4月上旬～中旬は、10～30匁の中羽が主であつた。このことは、島根県における、肥満度調査からもうかがわれる（第7図・島根水試）。

夏にとれる小羽イワシ漁も、一般に漁期が遅れ、しかも漁場は沖合に形成された。特に兵庫県方面では、春大羽の大不漁にもかかわらず、夏からは小羽イワシの来遊の多いが目立つたが、イカ・サバと共に小羽漁場は、27年より5裡以上も沖合に形成された。すなわち、7月上旬距岸15裡以遠、9月上旬20裡以遠であつた。

又鳥取県～石川県ではウルメイワシの来遊は1旬早く、兵庫県方面の春イワシは、大部分がウルメイワシという、特異現象であつた。漁法別にみると、大羽流刺網漁は青森・新潟・鳥取・島根・山口に良く、石川県～兵庫県の中日本海では、盛漁期の5月が全く不振であつた。しかし5月、富山湾以北では定置網によるマイワシ（体長10～15cm）は好漁であつた（例えば5月中旬、秋田県八森では1,400貫で、27年の2.6倍）。

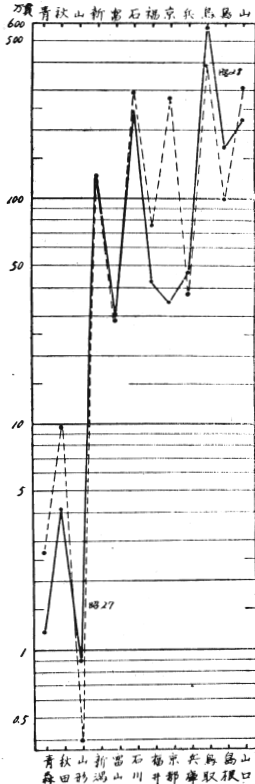
7月～11月の間、鳥取県では夜焚巾着網で大羽イワシ、島根県・山口県では夜焚敷網・曳網で中羽・小羽の好漁があつた。

サバ Mackerel

日本海のサバは *Scomber japonicus* を主体とする、新潟以西の魚である。佐渡島・能登半島・若狭湾・隠岐島を四大漁場とする。

28年の特徴は、若狭湾の大不漁(27年の約 $\frac{1}{3}$ , 78万貫, 最良の年昭和24年の $\frac{1}{10}$ )と、隠岐島方面の大豊漁(27年の1.5倍, 500万貫以上)であり、他は大体27年並であった。若狭湾のサバ大不漁は、若狭湾を始め、西日本海にわたるアジの大豊漁と著しい対照であった。結局日本海全体としては27年並の1,500万貫(全国6,261万貫の24%)で、内73%は日本海西区の漁獲である。山口県の不漁は、9~10月の秋サバの不漁(27年の $\frac{1}{5}$ )に基く(第8図参照)。

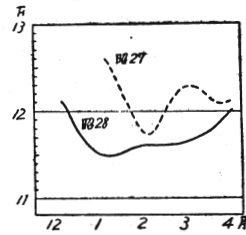
まず昭和23年以来途絶えていた、美保湾来游の春サバは、7年ぶりに、4月3日から弓ヶ浜半島東岸に大学押し寄せ、4月10日迄に、地曳網によって120万貫という中サバの大漁があつた。



第8図 日本海サバ類の府県別年別の年間漁獲高

アジ Horse mackerel

日本海のアジはマアジ *Trachurus trachurus* が大部分で、28年の総漁獲高は1,200万貫(全国6,376万貫の16%)で、マイワシ・サバに次ぐ第3位の魚種である。サバと同じく、新潟以西で大部分(99.5%)がとられるが、若狭湾を始めとするサバ巾着の大不漁にひきかえ、アジは対照的に大豊漁(1,019万貫, 27年の1.5倍強)で、富山湾以西、ことに島根方面は中・小アジの近年にない大豊漁(漁期は4~11月, 28年総数413万貫で、27年の3倍)であった。例えば、同県浜田では一函、木箱共25円という超安値さえ出た。又経ヶ岬方面の



第7図 島根県大羽イワシ肥満度の年別・月別変化 (F =  $\frac{W}{L^3} \times 10^3$ )

兵庫県方面(例年6月上旬に終る一本釣が、28年は逆に6月から活況を呈した。6月中旬14,000貫)を別として、大羽イワシのばあいとは逆に、全般的に1旬早く始漁となつた(曳釣・延縄・一本釣・定置網・刺網)。特に、佐渡真野湾では、例年より20日も早く、5月中旬に始漁となつた。

4月上旬富山県能生方面では、26年、27年と異り、アジと共にほとんど小形魚のみであったが、経ヶ岬~兵庫県でも、10月以降は、大部分が100~150匁程度で、例年比小形であった。

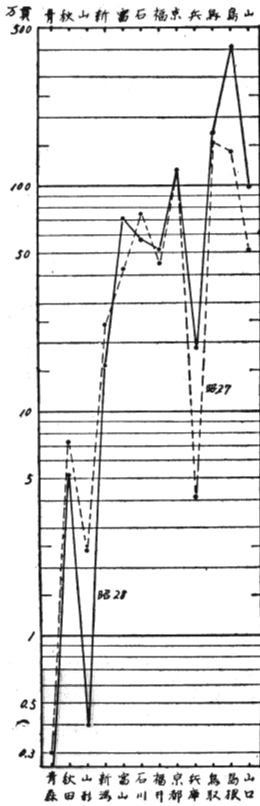
富山湾は1~3月の定置網と四つ手網の好漁が幸いして、27年の50%増となつた。

しかし秋サバは能登以北では比較的好漁であつた(例えば、富山県魚津の10月上旬は、1,100貫の一本釣漁獲があり、27年の約3倍)。

特に著しい現象は、若狭湾~兵庫県のサバ漁場は、スルメイカ・大羽イワシと共に漁場遠く(例年より5哩以上も沖合)、しかも若狭湾の秋サバは、游泳層も深く、一本釣で90~100尋であつた。若狭湾における28年のサバは、春も仲々浮上しなかつたことが大きな特徴であり、例年比大不漁ながらも、とれた春サバ(巾着網)の大部分は、浮上しないもの、すなわち魚探巻きによるものであつた。しかも5,6月ごろ、体長10cm未満の小サバが、かつてない程定置網にワンスと入網したことも特異現象であり、春の小サバの大繁殖は28年の秋サバ・29年のサバ漁にも、特別的好漁をもたらしていない。

一般に若狭湾のサバは、隠岐島方面より1週間遅れとなるが、28年春のように、彼我豊凶の差が余にも大であると、隠岐島方面から来游して来るという当業者の考えが、ぐらついたりする。

なお、隠岐島方面のサバの豊漁は、春秋共夜焚巾着網によるもので、昼巾着は不漁であつた。同方面の昼巾着網漁業は、昭和24年頃から本格的になつたものであり、昭和27年が最も好成績(推定900万貫)であつた。



第9図 日本海アジ類の府県別・年別の年間漁獲高

富山湾以北は不漁で、特に富山湾～新潟県の冬イカは不振を極め、盛漁期に当る1～3月の富山湾は、27年の $\frac{3}{8}$ ～ $\frac{1}{8}$ の旬間漁獲にすぎなかつた。夏イカの始漁は逆に1旬早く訪れたものの、7月の盛漁期に豊漁がみられず、結局28年を通じて、27年の25%、76万貫という不漁に終つた。一方山口県は7月に盛漁期に入り、7月上旬の漁獲約7万貫で、同旬総漁獲高の34%、27年の5倍という豊漁であつた。しかし冬イカ不振のため、年間通計は27年の40%に止まつた。

兵庫県方面の夏イカは、7～10日の遅れで、7月に入つてやつととれ出し(7月上旬5,300貫)ながらも、8～9月は今までにない豊漁であつたが、他の時期に振わず、結局年計において、27年の20%に止まつた。

兵庫県方面のスルメイカ漁の特徴：

- i) 27年の夏イカは、70匁位に一定していたが、28年は40～70匁で一定していなかつた。
- ii) 大羽イワシ・サバと共に、漁場が27年より5哩も沖合に形成された(距岸15哩以上)。8月中旬に至つてもなお、例年比5哩も沖合であつた。

8月下旬～9月上旬には、漁場は更に沖合に移り、一番沖合(距岸30～50哩)が魚体も一番大形(100匁)で、沿岸程小形(70～80

沿岸漁業者も、3月以来大漁続きであつたが、サバ不漁の巾着網船が、一本釣漁場に侵入して来るなどの悶着が非常に多かつた。ちなみに、若狭湾のアジは170万貫で、27年の2.2倍の豊漁であり、28年春のサバ巾着の漁獲のほとんどすべてが、アジであつた。

新潟県以北は27年より不漁(第9図)。兵庫県・新潟県方面の始漁は、それぞれ1旬、1カ月早かつた(一本釣)。

カレイ類 Flounders

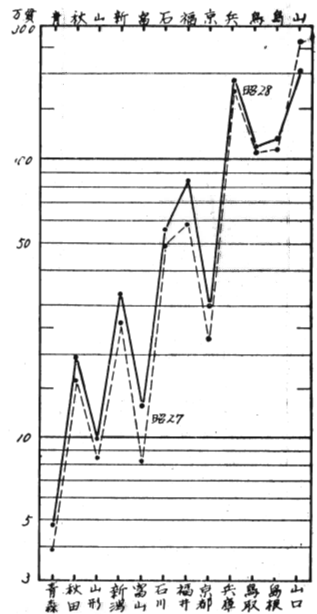
山口県の60万貫減の他は、各府県共27年より豊漁のため、日本海全体としては、27年より22万貫増の870万貫(全国3,173万貫の27.4%)となつた。カレイ類は西方多獲される(第10図)が、100万貫以上は兵庫以西の4県であり、621万貫(71%)を占める。特に、山口・兵庫は各200万貫の水揚げがある。魚種別にみると、兵庫のマガレイ・ババガレイ(各80万貫)、鳥根のムシガレイ(46万貫)、石川・福井・鳥取のアカガレイ(各20～35万貫)が主なものである。

スルメイカ *Ommastrephes sloani pacificus* (第11図)

日本海のスルメイカは、津軽海峡西口・佐渡～能登・隠岐島を3大漁場とするが、28年は若狭湾を除いて、軒並みの不漁であり、ことに富山湾において甚だしく、27年の $\frac{1}{10}$ という旬間漁獲高のこともあつた。結局日本海全体としては、27年の67%、784万貫に止まつた。これは全国11,202万貫の7%に当る。しかしスルメイカ以外のイカ類は、27年より豊漁で、5%増の428万貫であつた。

昭和27年12月以来大豊漁であつた、隠岐近海のスルメイカも、28年2月中旬に至つて終漁となつた。同期富山湾の冬

イカは1か月遅れの始漁であつた。富山湾以北は不漁で、特に富山湾～新潟県の冬イカは不振を極め、盛漁期に当る1～3



第10図 日本海カレイ類の府県別・年別の年間漁獲高

旬)であつた。以後9月中旬から沖合冷水域の接岸と共に、再び漁場は、時化毎に岸近くになつて来た。

兵庫県香住地方では、9月上旬の最盛期(9万貫)には、延1,887隻が出漁する盛況であつたが、同下旬を以て夏イカは終漁となつた。

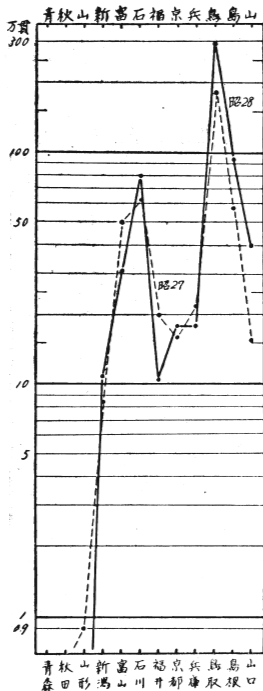
秋田県八森方面の一本釣は、ほとんど全部100匁以上の、近年にない大形であつた。

ところで最大漁場である、隠岐近海の28年冬イカは、半月遅れで、12月12日に漸やく初漁があり、同日西郷1万貫(一本釣)、浦郷4千貫(定置網3統)の漁であつた。そして12月中旬に至り、浦郷の総漁獲高16,000貫中14,000貫を占める程になつた。しかし、12月以降冬ブリと共に大不漁となり、一本釣の出漁は皆無となつた。すなわち旬間漁獲高は、27年冬の $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{6}$ となつた。

しかしてこの方面の特徴は、例年に比し、ムラ掛りが激しかつたことである。

ウルメイワシ *Etrumeus micropus* (第12図)

ウルメイワシは、全く新潟県以西の魚種である。中でも鳥取県は、とび抜けて漁獲が多く日本海総数の50%、295万貫を水揚げする。日本海総数は596万貫で、全国1,400万貫の43%を占める。鳥取県の120万貫増を始め、以西海面での豊漁にもかかわらず、富山・福井等諸県の不漁により、日本海総数は27年並となつた。ウルメイワシが、晩春ないし初夏にとれ出すと、マイワシの漁は終りを告げる。



第12図 日本海ウルメイワシの府県別・年別の年間漁獲高

スケトウダラ *Theragra chalcogramma*

(第13図)

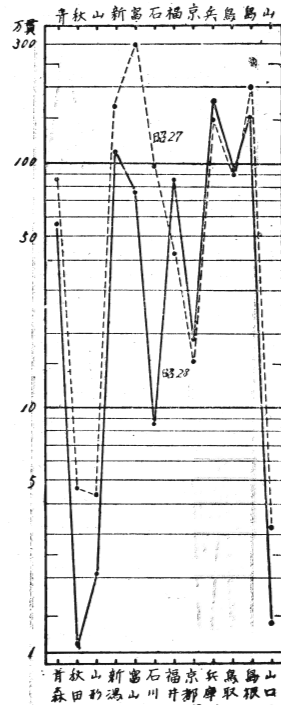
日本海における最多獲底魚で、佐渡・富山湾・加賀~越前を主漁場とする。28年の漁獲で著しい現象は、富山湾(富山県)の大不漁(41万貫、27年の40%)と、兵庫県の大豊漁(221万貫、27年の22倍)であり、又福井県・兵庫県を除く各地の不漁である。このため日本海全体としては、27年並の265万貫(全国6,007万貫の9.4%)に止まつた。

富山湾の大不漁は、5~8月の大不漁が原因であり、例えば、同湾の北側にあつて、スケトウダラ水揚の中心地である、石川県宇出津の漁獲高は、27年同期の1割にも達せず、スケトウ延縄船は四艘張網漁業に転業するものが多かつた。そして富山湾は10月以降の秋漁期に、刺網がかなりの始漁を示したこともあつたが、春の大不漁はついに回復できなかつた。

不漁の新潟県でも、佐渡北岸のみは、夏漁は非常な好漁で、魚体も例年にない大形魚であつた。しかし秋漁期は、約1か月遅れとなり、10月が盛漁期(10万貫)となつて、魚体も小形で、引続き不漁であつた。

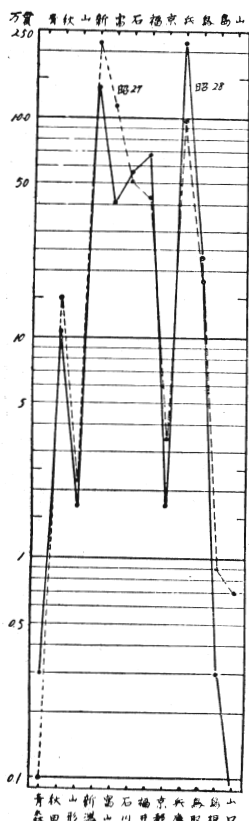
一方福井県~鳥取県の沿岸は好漁で、特に3~5月にわたる、兵庫県沿岸の底曳網は盛況で、27年の3倍以上の大漁であつた。すなわちこの3か月間で、兵庫県年間漁獲221万貫の90%、193万貫を水揚げした。

兵庫県沿岸(100尋線)が、スケトウダラの主要漁場であるのは奇異の感であるが、ここでは戦前ほとんどとれず、僅かに隠岐方面に細々と出漁しているにすぎなかつた。又小形魚のみであつたが、昭和26年頃から、香住を中心とする地先でとれ出し、27年からは本格的漁業となつた new face である。



第13図 日本海スルメイカの府県別・年別の年間漁獲高



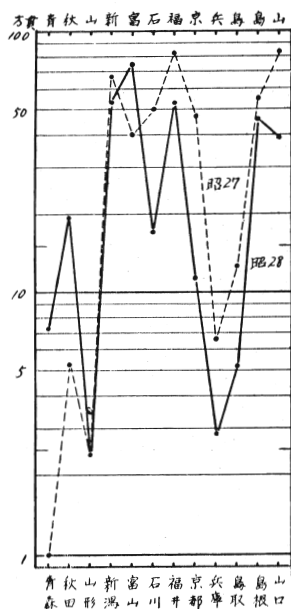


第13図 日本海スケトウダラの府県別・年別の年間漁獲高

現在の漁場は、香住沖15～20哩の陸棚縁辺である。

**ブリ** *Seriola quinqueradiata* (第14図)

ブリは入道崎・佐渡～若狭湾・島根県以西を主漁場とするが、28年は、富山湾以北は好漁、能登以西不漁で、結局日本海全体としては、27年の73% (331万貫、全国1,295万貫の25.6%)の不漁に終った。



第14図 日本海ブリの府県別・年別の年間漁獲高

富山湾水見方面を除いて、各地共漁期は非常に遅く、或はほとんど来游がなかつたりした。

4～7月の夏ブリ (600匁～1貫の魚体)は、山形県以北では、定置網に比較的好漁、特に秋田県では8月に豊漁であった (27年の4倍、20万貫)。新潟県では、小形イナダ類は好漁であつたが、定置網は大不漁。若狭湾は、1か月遅れの7月にやつと定置網にとれ出したが、7月一杯にわたつて、400匁以下のフクラギの大漁が続き、沿岸各地で、一網何万貫という好漁があり、氷の不足に悩んだ程であつた。

しかし冬ブリ (4～5才、2～3貫)は、日本海全般にわたつて不漁で、特に能登半島・隠岐島方面で甚しかつた。例えば、隠岐島の12月は、27年同期の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{4}$ という旬間漁獲高で、28年に戦後はじめて操業した飼付漁業も、ほとんど漁獲が

なかつた。しかし代つて、10～11月に、曳釣によつて小マグロが多獲された。

一方富山湾・佐渡両津湾における、10～11月の小ブリは好漁で、富山湾の如きは、27年同期の3～5倍の豊漁であつた。この小ブリの好漁によつて、大形ブリの不漁を補つて余りがあり、結局年間64万貫となつて、27年の2.7倍強の好漁となつた。

**アブラツノザメ** *Squalus suckleyi* (第15図)

アブラツノザメは、日本海産サメ類の大宗をなす魚種であり、北部日本海の重要漁獲対象である。主として新潟以北でとられるが、28年は、青森を除き軒並みに不漁であつた。日本海総数は、27年より40万貫減の199万貫 (全国953万貫の21%)の不漁となつた。

新潟～石川は来游早く (新潟は3月中旬に初漁)、山形は遅く、しかも延縄によるものは、例年♀が大半であるが、28年は逆に♂が大半を占めた。能登半島西岸は、27年と同様に大不漁で、ムラ掛りが激しかつた。新潟県の漁場は佐渡沖合であるが、28年は魚群濃厚であつたにもかかわらず、漁期は短かかつた。

京都・兵庫方面は、大体平年並の漁獲であつたが、他は全般的に不漁で、特に3～4月が香ばしくなかつた。

**小形マグロ**

青森県・秋田県の夏定置網；島根県・山口県の曳縄釣は好漁であつたが、新潟県～鳥取県の定置網・曳縄釣は、全般的に不漁であつた。又兵庫県の始漁は早く、11月上旬であつたが (曳縄釣)、新潟県は非常に遅れ

た。

一方冬ブリの大不漁に見舞われた隠岐島では、10~11月に、代つて小マグロばかりが、多獲された(曳釣)。

#### Ⅳ その他の魚種

ここには、地方的に重要なものについて述べることにする。

##### ハタハタ *Arctoscopus japonicus* (第16図)

主として底曳網でとられ、28年の日本海総数は、191万貫で、全国284万貫の67%を占める。島根県以西では、ほとんどとれない北方種である。

能登以北及び兵庫県は、この10年来にない大豊漁で、例えば秋田県(定置網)は67万貫で、27年の3倍強であつた。一般に漁期が早く始まり、特に石川県金石では、例年より100日余も早く、27年12月下旬からとれ出し、例年始漁となる3月に入ると共に、終漁となつた。

又兵庫県・新潟県を始め、比較的大形魚であつた。

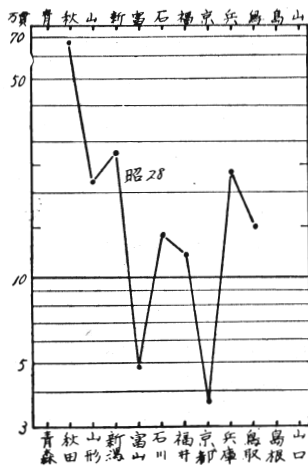
##### マス *Cherry-salmon* (第17図)

日本海のマスは、サクラマス *Onchorhynchus masou* であり、能登以北でとれる。特に青森・秋田・新潟を主漁場とする。28年の総漁獲は、27年比5,000貫増の9万貫(全国467万貫の2%)であつた。

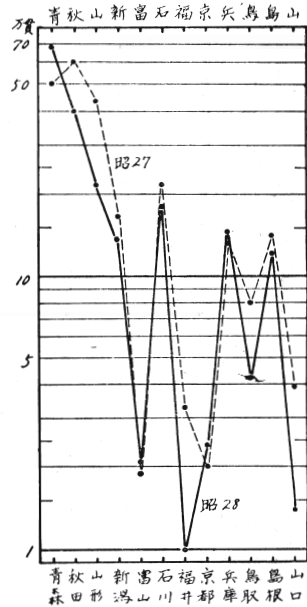
山形県~石川県の初漁は、1旬~半月早かつた(一本釣・毛釣・落網)。能登西岸では、2月下旬、毛釣のものは、100~500匁の魚体であつた。

##### サケ *Salmon* (第18図)

日本海のサケは、*Onchorhynchus keta* であるが、新潟県以北、ことに新潟県を主漁場(ふつう3万貫)とする。各地共、27年より不漁で、27年の60%、4.2万貫(全国288万貫の1.5%)



第16図 日本海ハタハタの府県別漁獲高



第15図 日本海アブラツノザメの府県別・年別の年間漁獲高

にすぎなかつた。

新潟県沿岸の定置網漁は、1旬遅れの11月中旬に初漁となつた。例年比小形で、300~700匁の魚体が多かつた。

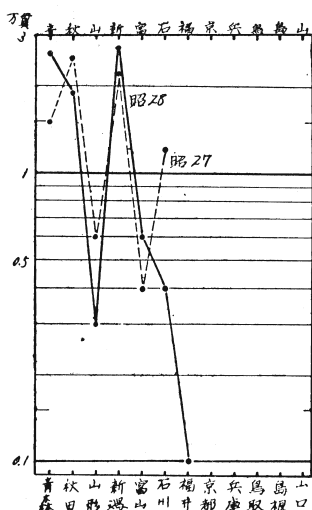
##### シイラ *Coryphaena hippurus*

全国140万貫の40%、56万貫の年間漁獲であつた。シイラは6~11月を漁期とするが、8~9月を盛漁期とする。日本海西区は51万貫で、北区の11倍である。暖海性魚種で、秋田県入道崎を以て、シイラ漬漁業の北限とする。島根県(24万貫)、鳥取県(10万貫)が、とび抜けて多い。27年より豊漁。ただし、兵庫~隠岐は不漁であつた。

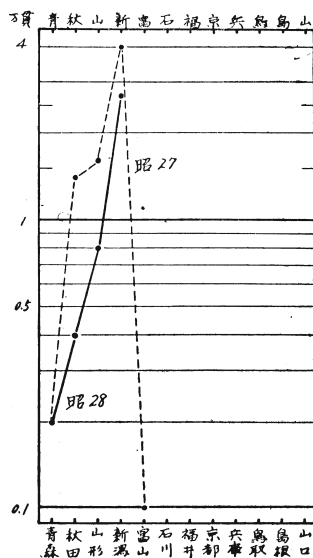
新潟県の漁場は、平年比沖合に形成され、かつ不漁であつた。しかし魚体は大きかつた。

##### イカナゴ *Ammodytes personatus*

全国1,755万貫の僅か9%、16万貫にすぎないが、内10万貫は福井県で占め、他は秋田の4万貫、山形の1万貫が目ほしい。山形県ではふつうほと



第17図 日本海マスの府県別・年別の年間漁獲高



第18図 日本海サケの府県別・年別の年間漁獲高

んどとれないが、28年は由良沖で、40年ぶりにバンバラ（大形イカナゴ）がとれた（底曳網）。

**ニギス** *Argentina kagoshimae*

全国185万貫の76%、141万貫の漁獲高を示したが、西区は北区の3倍以上の110万貫、内69万貫は兵庫県の水揚げである。主漁場は島根県浜田・見島方面であるが、やや遅れて10月下旬に初漁となった。

**ホツケ** *Pleurogrammus azonus*

ホツケは能登以北のみにとれる魚であり、28年の総数46万貫（全国4,226万貫の1%）中、青森県23万貫、秋田県15万貫で大部分を占める。

秋田県方面では始漁早く、かつ豊漁であった（魚体150匁大）。

**メバル**

石川県の始漁は半月早かった。

**タラ** *Gadus macrocephalus*

タラは日本海全体にとれるが、秋田県～島根県を主漁場とする（定置網）。富山県以北は27年並、或は以上であったが、石川県以西はすべて著しい不漁であった。年計は27年の45%、70万貫（全国741万貫の9.3%）の不漁となった。28年は全国的に不振で、全国総漁獲も、27年より250万貫の減となった。

秋田県のみは、1か月早く、1月上旬から始漁となったが、他は各地共遅れた。新潟県を除き全般的に不漁で、石川県では小形魚ばかりであった（3月上旬終漁）。

**モウカザメ** *Isurus nasus*

日本海では、ほとんど全部青森県と石川県でとれるが、日本海28年の総数は、27年の60%、5万貫（全国171万貫の3%）という不漁であった。

石川県は、27年より1旬早い始漁であったが（延縄）、アブラツノザメと同じく、ムラ掛りが甚だしかった。

**ヒラガシラ** *Scoliodon walbeehmi*

肝油原料として重要な、隠岐島のヒラガシラは、ふつう6月で終漁となるが、28年は7月一杯までとれた。7月中旬、2,500貫（底延縄）。

**ズワイガニ** *Chionoectes phalangium*

各地共豊漁であった（第19図）。ズワイガニは、日本では日本海のみにとれる漁獲対象である。山形県～島根県にわたつてとれるが、福井・兵庫・鳥取の3県を以て主産地とする（日本海全体の76%、152万貫）。日本海全体は200万貫を越す大豊漁で、27年の約7倍の漁獲であった。

隠岐島の初漁はやや遅れて、12月上旬であつた。

ホタルイカ *Watasenia scintillans*

富山湾特産のホタルイカは、27年より1週間遅れの3月中旬であつた(魚津、定置網)。

ワカメ *Undaria pinnatifida*

隠岐島では生育悪く、採草期を遅らせて、6月上旬からとした。不漁で27年の $\frac{1}{2}$ 。

V 若狭湾の特記現象

28年春からの現象であるが、漁業者もこれをで見たことのないような、次のような暖海性動物が見られた(福井県水産試験場長東田勇氏からの通報)。

スギ *Rachycentron canatum*

多数のスケトウダラと共に、定置網に入網した(半ノ浦・日向)。

ギンカガミ *Mene maculata*

アンコーウバウオ *Apasma laticephala*

共に定置網に入網(丹生)。

ツムブリ *Elagatis bipinnulata*

釣獲された。

アシカ *Eumetopias bobatus*

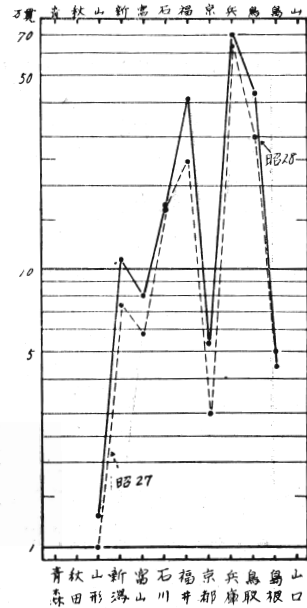
敦賀湾松島海岸に上陸

又若狭湾の湾口に位置する、京都府下宇川村でも次のようなものが見られた。

ツムブリ

エビラウナギ

キワダ



第19図 日本海ズワイガニの府県別・年別の年間漁獲高